

# 習作

くぼたかおう

ドアを開けると、ブラインドをおろす浩介の背中が迎えてくれた。彼の腕の動きに合わせて、部屋いっぱい腕を広げていた光が窓のふちに追いつめられていく。入れ替わりに夜の気配が足を踏み入れようとしていた。その侵入を防ぐため私は照明のスイッチを押す。そこでやっと彼は振り返り、大げさに目を細めて私を見た。

「暗がりでご飯食べたっておいしくないでしょう」

「やっぱり言うと思った。聞き飽きたよ」

呆れたように言葉を放って、それでも彼の目は期待に輝いている。浩介はベッドに腰掛けて私を手招きした。彼の元へ歩み寄る。先ほどまで陽が照らしていた床が暖かい。スリッパをじわじわと侵食して、私の足裏をくすぐった。温もりを引きずって彼の横に腰を下ろす。何者をも拒むような真白いシートが歪み、無数の線を描いて、私と浩介をつないだ。

薬品臭い空気の中で包みを広げる。結び目を解く指の緩慢とした動きを、浩介はうらめしそうに見つめていた。待ちきれないと言わんばかりに、膝の上で指が忙しく開閉している。そんな彼を横目に、弁当箱のふたを外す。この瞬間が好きだ。病室いっぱいに惣菜のにおいが広がって、日常らしさが顔を覗かせる。箸を添えて彼に手渡すと、押さえたトーンで感謝の言葉が返ってきた。隠しきれない喜びが口元に表れている。指摘すると照れて拗ねるものだから、私は何も言わず、唐揚げを頬張る彼を見つめていた。

あざとくもブラインドの隙間から入り込んでいた西日も、すっかり消えてしまった。きれいに平らげられた弁当をまた包み直して、立ち上がる。床も足裏もとっくに冷えていた。

「それじゃ」

「うん。気をつけて」

彼はベッドに横たわり、布団の中から私に手を振った。満腹感からくる眠気に目をこすって坑がっている。照明のスイッチを切ると、無遠慮にも暗闇が体を広げ、浩介を隠してしまった。この瞬間が嫌いで、帰り際はいつも足早で素っ気ないものになってしまう。音を立てないように留意しながらドアを閉め、彼の病室をあとにした。

青白い廊下を辿る。私はあと何度、彼に弁当を届けることができるのだろうか。浩介はいつからか点滴が外れ、個室に移っていた。トイレが不便だったから良かったとか、隣のおやじのいびきがうるさくて参っていたから嬉しいだとか言って彼は笑っていたが、その真意がわからないほど私は馬鹿ではない。

エレベーターのボタンを押したところで、水筒を置き忘れてきたことに気付き、病室へ引き返

した。そっとドアに手をかける。引き戸のそれを開けようと力を込めたところではっとした。

遠くでエレベーターが到着した音が聞こえた。ドアの取っ手が私の体温でぬるくなっていく。このドアにガラスが取り付けられていなくて良かった。すすり泣く浩介に、ドアの前で立ち尽くしている私の存在が知られなくて良かった。

母親というのはどうにもおせっかいなもので、何かにつけて口を挟みたがる。今だって妹の後ろでそわそわと落ち着かない。見かねた父が母を引っ張って台所から連れ出す。二人はそっと私の隣に座って、それでも視線はシンクの隣の調理台で奮闘する妹から離れなかった。

今年で九歳になる妹は、つい先ほど小学校から帰ってきた。今日は調理実習があったのだと言う。今回の調理実習で初めて包丁を握ったというのに、その腕を振るってくれるらしく、今日の晩ご飯はまかせてと豪語されてしまった。もちろん母は心配し、私に止めるよう言った。父は黙って聞いていたが、瞳に滲む不安が見て取れる。しかし私は妹の気持ちを汲み取り、手も口も出さないと固く約束して、今はソファに沈んでいるのだった。

改築当初は家族内で賛否両論あったが、オープンキッチンにして良かったと、誰もが思っているに違いない。髪を低い位置で結んだ妹の背中が、リビングのソファからでもよく見える。炊飯器に向かったかと思えば急いで反対側の冷蔵庫のほうに走ったり、足下の棚を開けたかと思えば頭上の棚に跳ねて手を伸ばしたりと忙しい。

妹の小さな手にそぐわない包丁がまな板をたたく。細腕にぐっと力を込めるたび肘が浮き、それと同時に小気味良い音がしてきゅうりがまな板から飛び出ていく。その様子を見ていた母が勢いよく立ち上がった。父も母に勝る勢いで立ち上がり、母の肩に手を置いてソファに押し戻す。二人のこのやりとりは、きゅうりのあとにトマトが転がって、豆腐と包丁が妹の掌の上で踊って、溶き卵に砂糖のふたが落とされるまで続いた。

「さあどうぞ、めしあがれ」

妹が手を合わせて言った。白い皿の上には緑のきゅうり、赤いトマトと、所々茶色い卵焼きが配置されていた。その皿の隣には、すっかり角が取れて丸くなった豆腐が浮いたみそ汁と、少し水気の多いご飯が並んでいる。これでもかというほどご飯を盛られた父のお椀が見えた。私も妹に倣って手を合わせる。父と母が妹の横に座っていた。母は何度も何度も、よくできたね、頑張ったね、ありがとうと妹に言った。父はただただ妹の頭を撫でている。膝を折って座る妹の背中から、照れくさそうな声が聞こえてきた。

「お父さんお母さん、わたしは一人でお料理ができるようになりました。がんばって作ったので食べてください。天国でも、しんぱいしなくていいよ。おねえちゃんとわたしは、ちゃんとごはんを食べるからね。お父さんとお母さんも、ちゃんと食べてね」

妹は私よりずっと卵焼きの成形がうまくて、そのことを褒めると、妹はさっと目を潤ませた。目の中でじわじわと膜を広げながらゆっくり俯いた妹が、か細い声でありがとうと言った。私の

目頭が熱いのは、みその分量が多くて塩辛いみそ汁のせいにした。

## 習作

<http://p.booklog.jp/book/64734>

著者：くぼたかおう

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/64734>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ